様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：２０１０３
研究種目：基盤研究(C)（特設分野研究）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８ＫＴ００８５

研究課題名（和文）身体動作のペア構造による相互共鳴メカニズムの解明

研究課題名（英文）Investigation of the mechanism of resonance achieved by paired bodily movements

研究代表者
坂井田　瑠衣（Sakaida, Rui）

公立はこだて未来大学・システム情報科学部・准教授

研究者番号：９０８１５７６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，共在状態での相互行為における参与者の身体動作が，他者の音声発話や身体動作との間にいかなるペア構造（連鎖構造）を構成し，相互に共鳴するためのメカニズムとして機能しているかを，相互行為分析によって明らかにし，場面横断的に考察した．さまざまな社会的場面において収録されたデータの相互行為分析を踏まえ，それらの場面で見られた「共鳴」のあり方を横断的に検討した結果，「現象としての共鳴」と「状態としての共鳴」という2つの単位で共鳴を記述することができるのではないかという方向性が示唆された．

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の相互行為研究では主に音声発話の連鎖構造が扱われてきたのに対し，本研究では身体動作の連鎖構造を扱った．発話連鎖の研究においては，主に社会学の観点から発話連鎖の社会的規範を記述することが目指されてきたが，身体動作が相互行為連鎖の構成要素としてどのような機能を果たしうるのかは十分に明らかになっていない．この点を解明するために，本研究では，これまで社会的相互行為論だけでなく認知科学，生態心理学，言語学の立場から身体動作による相互行為を研究してきた研究代表者および研究分担者が共同し，身体動作のペア構造がもたらす相互共鳴のメカニズムに迫った．

研究成果の概要（英文）：In this study, we analyzed what kind of pair structure (sequence organization) the participants' body actions and the spoken utterances or body actions of coparticipants in social interaction constitute and examined how it functions as a mechanism for mutual resonance. Based on interaction analysis of video data recorded in various settings, we discussed the nature of "resonance" and suggested the possibility of characterizing resonance in two ways, that is, "resonance as a phenomenon" and "resonance as a state".

研究分野：認知科学

キーワード：身体動作　行為連鎖　共鳴　相互行為分析　マルチモダリティ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1) 学術的背景

例えば「おはよう」「おはよう」という発話のペアが挨拶の交わし合いとして機能するように，自分と相手の行為に有意味なペア構造をつくりあげることは，相互行為において相手との社会的関係を構築するために不可欠な行為である．他方，共在性の高い対面相互行為においては，音声発話だけでなく，しばしば身体動作による行為もペア構造の構成要素になる．例えば医療場面では，医師が患者に医療器具を差し出すと，患者はそれに呼応し，衣服を捲って身体を晒したり特定の身体部位を差し出したりする（Heath，1986）．コーチングなどの教示場面では，言語的な教示に対して教示された行為を正確に身体動作で表現することが求められる（Mondada，2014）．実空間の物質的世界（Streeck et al.，2011）に埋め込まれたコミュニケーションにおいては，このような共在性を基盤とした身体的行為の連鎖が重要な役割を果たす．

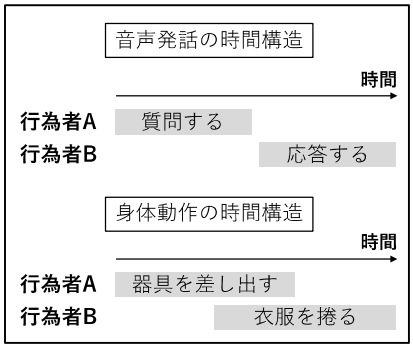

図１　音声と身体のペアにおける時間構造

音声会話における発話のペア構造（e.g. 挨拶―挨拶，質問―応答）を定式化した概念として，隣接ペア（Schegloff & Sacks，1973）がある．音声発話の隣接ペアの規範は，ある話者が発話した隣接ペア第１成分（e.g. 質問）に対し，異なる話者が適合するタイプの第2成分（e.g. 応答）を即座に発話する，というものである．音声会話では聴覚を基盤とするため，聞き取りやすさを保つために発話の重なりは基本的に避けられる傾向が強い．他方，上述したような身体動作によるペア構造の場合，視覚や触覚を媒介するため，発話と動作あるいは動作同士の重なりや共起は音声に比べてさほど問題とならない（図1）．さらに身体動作のペア構造は，時間的にだけでなく空間的にも組織化される．例えば医療場面の施術行為やスポーツのコーチングには，身体的な接近や接触が伴う（図2）．音声発話の連鎖構造がリニアな構造を持つのに対し，身体動作の連鎖構造は時間的共起や空間的接近を伴い，より多層的な構造を持つ．

図２　身体的接近を伴うペア構造

(2) 研究課題の核心をなす学術的「問い」

本研究課題の核心をなす「問い」は，身体動作によるペア構造は，いかにして相互行為の相手に共鳴するためのメカニズムとして機能し，共在における社会的関係の構築に寄与しているかというものである．本研究での「共鳴」とは，相手の行為に対してその場限りの賛同や同調を示すだけでなく，例えば共同作業や学習の達成，親疎関係の深化など，相互行為を通して達成されるべき共通の目的に志向しあった状態を意味する．上述したように，身体動作のペア構造は，相互行為上の時間的および空間的組織化という点で，音声発話のペア構造とは大きく異なる特性を持つ．時間的な重なりを許容し，身体的な接近や接触を伴う身体動作の連鎖構造は，我々の相互行為にどのような影響を与え，相互共鳴を可能にしているのだろうか．行為者Ａに対する行為者Ｂの反応には，ＢがＡの行為の意図や思惑，動機をどのように理解したかが表現されるが（Sacks et al.，1974），本研究では，とりわけＢの反応が身体動作によってなされる場合，Ｂによる共鳴がより強調されるのではないかという仮説を立てている．身体動作は，音声発話以上に，行為者が伝達しようとする内容を超えた情報を他者に表出するという特性を持つためである（Goffman，1963）．

この問いは「コミュニケーションの共在性とは何か」という問いを実際の相互行為の水準で具体化したものでもある．身体動作によるペア構造は，視覚や触覚を媒介するという点で共在性の高いコミュニケーションに特有の現象であり，SNSなど共在性の低いコミュニケーションでは生じない．共在状態を伴わないコミュニケーションが日常化する現代社会において，共在性の高いコミュニケーションがいかに人々の相互共鳴の基盤となっているかを明らかにすることが，今後のコミュニケーションのあるべき姿を考えるために不可欠である．

２．研究の目的

(1) 目的

本研究の目的は，共在状態での相互行為における参与者の身体動作が，他者の音声発話や身体動作との間にいかなるペア構造（連鎖構造）を構成し，相互に共鳴するためのメカニズムとして機能しているかを相互行為分析によって明らかにし，場面横断的に考察することである．

(2) 本研究の学術的独自性と創造性

従来の相互行為研究では主に音声発話の連鎖構造が扱われてきたのに対し，本研究では身体

動作の連鎖構造を扱う．発話連鎖の研究においては，主に社会学に立脚した社会的相互行為論の観点から，発話連鎖の社会的規範（ある発話に対し，どのような反応が規範的に期待されるか）を記述することが目指されてきた．会話分析者の Schegloff（2007）は身体動作の連鎖構造が音声発話の隣接ペアと同様に記述できる可能性に言及しているものの，そもそも身体動作が相互行為連鎖の構成要素としてどのような機能を果たしうるのか明らかになっていない．この解明には，社会的相互行為論の観点に加え，身体動作がいかに相互行為を取り巻く複雑な状況に埋め込まれて産出されるかという状況的認知論の観点，周囲の環境への身体的な情報探索（知覚）がどのように行為を調整するかというアフォーダンス理論の観点，言語行為をなす音声言語に対して身体動作はいかなる言語行為的な機能を担いうるのかという語用論の観点が不可欠である．そこで本研究では，これまで社会的相互行為論だけでなく認知科学，生態心理学，言語学の立場から身体動作による相互行為を研究してきた研究代表者および研究分担者が共同し，身体動作のペア構造がもたらす相互共鳴のメカニズムに迫る．

３．研究の方法

(1) 概要

複数の社会的場面における相互行為を映像データに収録し，相互行為分析の方法を用いて身体動作のペア構造を分析し，複数の社会的場面を横断した考察を行うことで，身体動作のペア構造の相互共鳴メカニズムを明らかにすることを試みた．

(2) データ収録

身体動作によるペア構造が重要な役割を担う社会的場面として，診療・施術場面，教示・学習場面，子どもの養育場面などを対象とし，映像収録した．

(3) 相互行為分析

(2)で収録した映像データを対象に，以下の手順で相互行為分析を行った．

① 簡易トランスクリプトによる粗起こし
② 類似事例のデータコレクション
③ マルチモーダルトランスクリプトによる詳細分析

さらに定期的にデータセッションを開催し，分析の進捗状況を報告するとともに今後の分析の方向性を議論した．

(4) 理論的考察

(3)で各自が実施した分析結果を持ち寄り，全場面の分析結果に対して考察を行った．

４．研究成果

(1) 概要

さまざまな社会的場面において収録されたデータの相互行為分析を踏まえ，それらの場面で見られた「共鳴」のあり方を横断的に検討した結果，「現象としての共鳴」と「状態としての共鳴」という 2 つの単位で共鳴を記述することができるのではないかという方向性が示唆された．そこで以下では，「現象としての／状態としての共鳴」それぞれについて得られた研究成果の一部を簡潔に説明する．

なお本研究課題から生まれた問題意識をさらに探究するために，科研費基盤 C の研究課題「身体性を伴う「理解」の相互行為分析：共在する人々の非対称性に着目して」を立案・応募し，2022 年度より開始した．本研究課題の成果を基盤として，身体的相互行為がもたらす相互理解のメカニズムについて検討を進める予定である．

(2) 現象としての共鳴の分析

研究代表者の坂井田は，相互行為の参加者が「他者に共鳴している」ことが具体的な現象にあらわれている事例として，会話における聞き手のふるまいを分析した（坂井田，2020）．会話において，聞き手は，話し手に絶えず視線を向けるなどして「話し手の話を注意深く聞いている」という姿勢を保つのが最も典型的な姿だと考えられている（Goodwin，1981）．しかし実際には，会話において聞き手が「相手の話を聞いている」こと以上のさまざまな反応を示す様子が見られる．例えば，相手の話を理解しようとしていることを自らの身体をとおしてありありと経験するとともに，そのことを示そうとするというふるまいが見られた．このようなふるまいは，聞き手が聞き手でありながらも，話し手に共鳴しながら会話に参加する方法の一つであると考えられる．

また同じく坂井田は，相互行為の参加者が「場面に共鳴している」とでも言うべき共鳴の姿に注目して観察した（坂井田，近刊）．たとえば歯科診療場面での歯科医師と患者の相互行為において，歯科医師が話し手として発話しているあいだに，聞き手として参加している患者が身体的な行為を産出する事例を分析した．そうした聞き手の行為は，ローカルな相互行為の連鎖の水準においては冗長かつアドレス性の弱いものであったが，その冗長さは，歯科診療という場面の特性に照らして考えると合理的なものとして理解できることが明らかとなった．すなわち，患者が

歯科診療という場面に共鳴していることが，具体的なふるまいとしてあらわれたものと位置づけることができる．

研究分担者の遠藤は，モノの受け渡しが見られる場面を対象として，要求―受諾・実行の連鎖における第二成分が身体動作で達成されるやりとりを分析した（Endo，2021）．モノの受け渡しにおいて，要求されたものを成功裡に受け渡すには，要求する側が何を要求しているのかを要求される側に理解させる必要があるとともに，受け渡しのタイミングが合致する必要があるが，受け渡しの要求において手や腕が先に動くことが，何を要求しているのかを要求される側に理解させることに寄与している可能性が示唆された．その場に共在するだけでは担保されない活動・行為の理解が達成され，活動の進行に関する同調（alignment）が見られる場面において，参与者間での共鳴が生じている可能性が示唆された．

(3) 状態としての共鳴の分析

研究代表者の坂井田は，多人数が複数の焦点を共有しながら協業する場面において，共同作業を有機的に進めるための基盤として「共鳴的共在」という状態が維持されているのではないかという仮説を提案した（坂井田，2021）．たとえば歯科医院において業務に従事する人々は，複数人によって協業することで，複数の患者に対する診療プロジェクトを円滑に遂行するという目的を共有している．そのため，常に「他者からの情報共有」や「他者からの援助の求め」に対応できるよう，それらに対する相互予期を保っている．そこでは，人々は診療室の空間内にただ共在しているだけではなく，そうかといって常に単一の焦点のある診療活動に従事しているわけでもない．そうではなく，各々が今やるべきことに粛々と従事しつつ，他者からの働きかけがあればそれに対して即座に応答する準備をしておく，という共在の構えがあると考えられる．この共在の姿を，「互いの存在や行為に対して共鳴しあいながら共在している」，すなわち「共鳴的共在」と特徴づけることを試みた．

研究分担者の名塩は，長唄三味線の稽古場面を対象として，指導―学習過程での習い手の行為に見られる探索的な側面に焦点を当て，必ずしも互いに連結/隣接しているとは言えない行為群を一つの達成に向けて協調的に収束させる認知的基盤を記述することを試みた．稽古本編には見られない習い手の主体的な側面と指導者の情報過多な指導が観察される場面を分析し，そこで見られる指導と学習の並行/すれ違いが，稽古へ志向する者同士の共鳴状態にあたるのではないかと考察した．

＜引用文献＞

Endo, T. (2021). Cooperation of body and language: Object-transfer requests in Japanese interaction. Japanese/Korean Linguistics, 28, 147-159.

Goffman, E. (1963). Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings. Free Press.

Goodwin, C. (1981). Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers. Academic Press.

Heath, C. (1986). Body Movement and Speech in Medical Interaction. Cambridge University Press.

Mondada, L. (2014). Cooking instructions and the shaping of things in the kitchen. In Nevile, M., Haddington, P., Heinemann, T. & Rauniomaa, M. (Eds.), Interacting with Objects: Language, Materiality, and Social Activity, pp. 199-226. John Benjamins.

Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. Language, 50 (4), 696-735.

坂井田瑠衣（近刊）．聞き手として行為をなすこと：歯科診療における患者の身体的行為から．伝康晴・前川喜久雄・坂井田瑠衣（監修）・有本泰子・坂井田瑠衣・岡田将吾（編），『他者と対峙する』(シリーズ 言語・コミュニケーション研究の地平)．ひつじ書房．

坂井田瑠衣（2021）．「共鳴的共在」としての歯科診療の場．木村大治・花村俊吉（編），『出会いと別れ：「あいさつ」をめぐる相互行為論』，pp. 147-165．ナカニシヤ出版．

坂井田瑠衣（2020）．相手のふるまいに寄り添う：日常会話の間合い．諏訪正樹（編著）・伝康晴・坂井田瑠衣・高梨克也（著），『「間合い」とは何か：二人称的身体論』，pp. 55-83．春秋社．

Schegloff, E. A. & Sacks, H. (1973). Opening up closings. Semiotica, 8, 289-327.

Schegloff, E. A. (2007). Sequence Organization in Interaction, A Primer in Conversation Analysis, 1. Cambridge University Press.

Streeck, J., Goodwin, C. & LeBaron, C. (Eds.) (2011). Embodied Interaction: Language and Body in the Material World. Cambridge University Press.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計21件（うち査読付論文　12件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 坂井田瑠衣	４．巻 -
２．論文標題 「共鳴的共在」としての歯科診療の場	５．発行年 2021年
３．雑誌名 出会いと別れ：「あいさつ」をめぐる相互行為論	６．最初と最後の頁 147-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂井田瑠衣・坊農真弓	４．巻 20
２．論文標題 盲ろう者にマルチモダリティを伝える指点字通訳者のワーク	５．発行年 2021年
３．雑誌名 質的心理学研究	６．最初と最後の頁 S118-S124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24525/jaqp.20.Special_S118	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 名塩征史	４．巻 2-09
２．論文標題 「空手の形（かた）の稽古に用いられる「号令」：実在しない相手との「間合い」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本認知科学会「間合い」研究分科会，JCSS SIG Maai 2021	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Nashio Seiji	４．巻 4
２．論文標題 Interaction for Synchronization: Multimodal Analysis of the Process of Instructing and Learning Shamisen Skills	５．発行年 2022年
３．雑誌名 広島大学森戸国際高等教育学院紀要	６．最初と最後の頁 55～67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/52360	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 遠藤智子	4．巻 1
2．論文標題 家庭内における遊びと感情の表出：遊びの展開と対立のマネジメント	5．発行年 2021年
3．雑誌名 エスノメソドロジー　住まいの中の小さな社会秩序　家庭における活動と学び：身体・ことば・モノを通じた対話の観察から	6．最初と最後の頁 105-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ron Korenaga, Ippei Mori, Masafumi Sunaga, Satoru Ikegami and Tomoko Endo	4．巻 5
2．論文標題 Embodied practice in a tidying up activity: Responsibility of family members for their objects	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Research on Children and Social Interaction	6．最初と最後の頁 151-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tomoko Endo	4．巻 28
2．論文標題 Cooperation of Body and Language: Object-Transfer Requests in Japanese Interaction	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6．最初と最後の頁 147-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tomoko Endo	4．巻 13
2．論文標題 Multimodal conflict resolution: A conversation analytic study of a group work activity in English class	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Komaba Journal of English Education	6．最初と最後の頁 27-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 牧野遼作・坂井田瑠衣・居關友里子・坊農真弓	4．巻 23(1)
2．論文標題 子供を「主役」とする教育的活動の相互行為分析―博物館における展示物解説を対象として―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 社会言語科学	6．最初と最後の頁 116-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19024/jajls.23.1_116	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂井田瑠衣	4．巻 2020年12月11日号
2．論文標題 書評 伊藤亜紗著『手の倫理』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 週刊読書人	6．最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 名塩征史	4．巻 23(1)
2．論文標題 身体的技術の指導-学習過程における相互行為―年少者向け空手教室での「相手を意識した」経験の共有―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 社会言語科学	6．最初と最後の頁 100-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19024/jajls.23.1_100	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 名塩征史	4．巻 -
2．論文標題 同時演奏を基調とする三味線の稽古場面のマルチモーダル分析―「演奏すること」を教授する対面・同期形式での指導―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本認知科学会第37回大会発表論文集	6．最初と最後の頁 412-420
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 名塩征史	4．巻 3
2．論文標題 語りに伴うジェスチャーが会話の場にもたらす影響についての一考察―語りによる出来事の再現と図像的ジェスチャー―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 森戸国際高等教育学院紀要	6．最初と最後の頁 14-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Anna Vatanen, Tomoko Endo & Daisuke Yokomori	4．巻 -
2．論文標題 Cross-linguistic investigation of projection in overlapping agreements to assertions: Stance-taking as a resource for projection	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Discourse Processes	6．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/0163853X.2020.1801317	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Tomoko Endo & Daisuke Yokomori	4．巻 -
2．論文標題 Self-addressed questions as fixed expressions for epistemic stance marking in Japanese conversation	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Ritva Laury & Tsuyoshi Ono(Eds.), Fixed Expressions: Building language structure and social action	6．最初と最後の頁 203-236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/pbns.315.08end	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tomoko Endo	4．巻 172
2．論文標題 The Japanese benefactive -te ageru construction in family and adult interactions	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Journal of Pragmatics	6．最初と最後の頁 239-253
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂井田瑠衣・坊農真弓・牧野遼作	4．巻 19
2．論文標題 「次の場所まで歩く」ことの相互行為的組織化：科学コミュニケーターによる来館者誘導の身体的プラクティス	5．発行年 2020年
3．雑誌名 質的心理学研究	6．最初と最後の頁 7-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 牧野遼作・坂井田瑠衣・坊農真弓	4．巻 43(3)
2．論文標題 社会的インタラクションの定性的研究：振る舞いの連なりに対する相互行為分析	5．発行年 2019年
3．雑誌名 バイオメカニズム学会誌	6．最初と最後の頁 188-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tomoko Endo	4．巻 -
2．論文標題 Embodying stance: wo juede ‘I feel/think’ and gaze	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Xiaoting Li and Tsuyoshi Ono (Eds.), Multimodality in Chinese Interaction	6．最初と最後の頁 148-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/9783110462395-007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 遠藤智子・高田明	4．巻 -
2．論文標題 家庭内の共同活動における子どもの指さしと養育者の反応	5．発行年 2019年
3．雑誌名 安井永子・杉浦秀行・高梨克也（編）『指さしと相互行為』	6．最初と最後の頁 161-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tomoko Endo, Anna Vatanen & Daisuke Yokomori	4．巻 21
2．論文標題 Agreeing in overlap: A comparison of response practices and resources for projection in Finnish, Japanese and Mandarin talk-in-interaction	5．発行年 2018年
3．雑誌名 社会言語科学	6．最初と最後の頁 160-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19024/jajls.21.1_160	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計41件（うち招待講演　6件／うち国際学会　26件）

1．発表者名 Mayumi Bono, Rui Sakaida, Kanato Ochiai and Satoshi Fukushima
2．発表標題 Maintaining intersubjectivity in finger braille interpreter-mediated interaction: A study of other-initiated repairs by a deafblind man
3．学会等名 17th International Pragmatics Conference（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Yasusuke Minami, Nisisawa Hiro Yuki, Rui Sakaida and Mitsuhiro Okada
2．発表標題 Practice-embedded-demonstration in instruction sequences between an orientation and mobility specialist and a person with visual impairment
3．学会等名 17th International Pragmatics Conference（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 坂井田瑠衣
2．発表標題 「リフレクティブな共在の構え」は観察可能か
3．学会等名 第3回社会言語科学会シンポジウム（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 Nisisawa Hiro Yuki and Rui Sakaida
２．発表標題 Touching in the streets, on the road, in the museums
３．学会等名 International Workshop “Museum, Multimodality and Embodiment, Sociological Robotics”（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 南保輔・西澤弘行・坂井田瑠衣・岡田光弘・佐藤貴宣・吉村雅樹・秋谷直矩
２．発表標題 視覚障害者の歩行訓練と複合感覚性：反響定位を中心に
３．学会等名 エスノメソドロジー・会話分析研究会 2021年度 春の研究例会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Nashio Seiji
２．発表標題 The Application of Standard Melody Patterns to Instruction in Shamisen Lessons: Findings from Multimodal Analysis of Shamisen Practice through Simultaneous Imitation
３．学会等名 17th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 名塩征史
２．発表標題 会話における「認識性」を巡る日本語の事例分析
３．学会等名 第19回対照言語行動学研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 名塩征史
２．発表標題 教えるための参加・学ぶための参加 ： 年少者向け空手教室における指導―学習過程の分析
３．学会等名 ことば・認知・インタラクション10
４．発表年 2022年

１．発表者名 Tomoko Endo
２．発表標題 De-ritualization as management of social roles: Multimodal analysis of ritual language and bodily behavior
３．学会等名 17th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Mayumi Bono, Rui Sakaida, Tomohiro Okada & Yusuke Miyao
２．発表標題 Utterance-unit annotation for the JSL dialogue corpus: Toward a multimodal approach to corpus linguistics
３．学会等名 9th Workshop on the Representation and Processing of Sign Languages, LREC 2020 Workshop（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 坂井田瑠衣
２．発表標題 触ることで知る：視覚障害者の環境把握における複感覚的相互行為
３．学会等名 第89回 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会（SIG-SLUD）
４．発表年 2020年

１．発表者名 名塩征史
２．発表標題 長唄三味線の稽古中に師匠が用いる「ね」発話の様相
３．学会等名 ことば・認知・ インタラクション9
４．発表年 2021年

１．発表者名 Tomoko Endo
２．発表標題 Body-language collaboration in object transfer requests in Japanese conversation
３．学会等名 Japanese/Korean Linguistics Conference（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 坂井田瑠衣
２．発表標題 「共に面白く語る」という身体知：「共-操作的行為」としてのフリートーク
３．学会等名 第31回人工知能学会身体知研究会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 遠藤智子
２．発表標題 英語学習活動の相互行為における知識や理解の交渉：イントロダクション
３．学会等名 日本語用論学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 遠藤智子
２．発表標題 認識動詞を用いた話し手の態度表明：認識的モダリティと認識的スタンス
３．学会等名 日本英語学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Brian Due, Rui Sakaida, Nisisawa Hiro Yuki, Yasusuke Minami & Louise Luchow
２．発表標題 The shape of objects: Blind people’s tactile work to establish understanding about the physical shape and form of objects
３．学会等名 5th Copenhagen Multimodailty Day 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tomoko Endo
２．発表標題 Bodily behavior as constructional meaning: The case of benefactive construction in Japanese family interaction
３．学会等名 International Cognitive Linguistics Conference 15（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasusuke Minami, Nisisawa Hiro Yuki, Rui Sakaida, Takanori Sato, Naonori Akiya & Masaki Yoshimura
２．発表標題 Information giving and receiving with focus on "perception" of the visually-impaired: Combined usages of touching and kore in street-walking training sessions
３．学会等名 2019 Conference of the International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasusuke Minami, Nisisawa Hiro Yuki, Rui Sakaida, Takanori Sato, Naonori Akiya & Masaki Yoshimura
２．発表標題 Competition and mutual complementation between two place formulations: Asymmetric participation resources in interaction between visually-impaired and sighted people
３．学会等名 Atypical Interaction Conference 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nisisawa Hiro Yuki, Yasusuke Minami, Rui Sakaida & Kawasima Akiko
２．発表標題 Collaborative achievement of intersubjective understanding in multi-layered asymmetrical talk-in-interaction: Daily life scenes of a person with aphasia from ethnomethodological and conversation analytic perspectives
３．学会等名 Atypical Interaction Conference 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Rui Sakaida
２．発表標題 Multimodal and multi-sensorial practices of examination in dentistry
３．学会等名 16th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mayumi Bono & Rui Sakaida
２．発表標題 Halting progressivity and repair in signed and tactile interaction: A study of intersubjective understanding in sign language and finger braille
３．学会等名 16th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Seiji Nashio
２．発表標題 Instructive utterances contributing to multimodal instruction in child-oriented karate lessons: Variety of utterances intended to correct the bodily motions
３．学会等名 16th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tomoko Endo
２．発表標題 Membership and participation: Child as a resource for interaction between in-laws in Japanese casual conversation
３．学会等名 16th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 坂井田瑠衣・坊農真弓
２．発表標題 人はいかにして「一緒に歩く」ことを達成するのか: 科学館における展示物間の移動をめぐる相互行為
３．学会等名 第61回電子情報通信学会ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Rui Sakaida & Yasuharu Den
２．発表標題 Sitting down and standing up as resources for reorganization of participation framework: Analysis of preparatory meeting for Nozawa Onsen Fire Festival
３．学会等名 11th International Conference on Language Resources and Evaluation（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Rui Sakaida, Ryosaku Makino & Mayumi Bono
２．発表標題 Preliminary analysis of embodied interactions between science communicators and visitors based on a multimodal corpus of Japanese conversations in a science museum
３．学会等名 11th International Conference on Language Resources and Evaluation（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mayumi Bono, Rui Sakaida, Ryosaku Makino & Ayami Joh
２．発表標題 Miraikan SC Corpus: A trial for data collection in a semi-open and semi-controlled environment
３．学会等名 11th International Conference on Language Resources and Evaluation（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mayumi Bono, Rui Sakaida, Ryosaku Makino, Tomohiro Okada, Kouhei Kikuchi, Mio Cibulka, Louisa Willoughby, Shimako Iwasaki & Satoshi Fukushima
２．発表標題 Tactile Japanese sign language and finger braille: An example of data collection for minority languages in Japan
３．学会等名 11th International Conference on Language Resources and Evaluation（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Rui Sakaida & Mayumi Bono
２．発表標題 When nonverbal behavior is interpreted: Strong orientation toward embodiment in finger braille interpretation
３．学会等名 The International Society for Gesture Studies Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Rui Sakaida, Hiro Yuki Nisisawa & Yasusuke Minami
２．発表標題 Co-constructed knowledge of surrounding environments: Collaboration between the visually impaired and the sighted
３．学会等名 5th International Conference on Conversation Analysis（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Tomoko Endo, Anna Vatanen & Daisuke Yokomori
２．発表標題 Cross-linguistic investigation of projection in overlapping agreements to assertions
３．学会等名 5th International Conference on Conversation Analysis（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Tomoko Endo, Anna Vatanen & Daisuke Yokomori
２．発表標題 Two levels of projection: cross-linguistic investigation of agreeing overlapping response
３．学会等名 The 3rd International Conference on Interactional Linguistics and Chinese Language Studies（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Tomoko Endo
２．発表標題 Ancestor or Grandpa: Referential forms in Japanese household shinto ritual
３．学会等名 Referentiality Workshop（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 名塩征史
２．発表標題 三味線の稽古場面における師匠と習い手の相互行為－マルチモーダルな指導における発話形式の使い分け－
３．学会等名 第42回社会言語科学会研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 遠藤智子
２．発表標題 参与構造の類型について：日常会話コーパスを用いたボトムアップのアプロー チ
３．学会等名 シンポジウム『日常会話コーパス Ⅳ』
４．発表年 2019年

１．発表者名 坂井田瑠衣
２．発表標題 身体動作による参与構造の組織
３．学会等名 シンポジウム『日常会話コーパス Ⅳ』
４．発表年 2019年

１．発表者名 西澤弘行・坂井田瑠衣・南保輔
２．発表標題 引き延ばされる「今」：視覚障害者の歩行訓練場面に於ける「『今・ここ』性の違い」と「タイミング調整」
３．学会等名 第85回 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Seiji Nashio
２．発表標題 Instructive bodily demonstrations situated in Karate lessons
３．学会等名 EIL2019 & LCI-7 Joint International Symposium（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 坂井田瑠衣
２．発表標題 暗黙的協同と共鳴的共在
３．学会等名 第13回電子情報通信学会ヴァーバル・ノンヴァーバル研究会年次大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 堀江薫・黄祺佳・木本幸憲・遠藤智子・池沙耶・山田仁子・小松原哲太・伝康晴・名塩征史・早野薫・椎名美智・滝浦真人・北野浩章・片岡邦好	４．発行年 2021年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 312
３．書名 動的語用論の構築へ向けて 第3巻	

１．著者名 諏訪正樹（編著）・伝康晴・坂井田瑠衣・高梨克也（著）	４．発行年 2020年
２．出版社 春秋社	５．総ページ数 272
３．書名 「間合い」とは何か：二人称的身体論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	名塩　征史 (Nashio Seiji) (00466426)	広島大学・森戸国際高等教育学院・講師 (15401)	
研究分担者	遠藤　智子 (Endo Tomoko) (40724422)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
デンマーク	コペンハーゲン大学			